

交錯する惑星：前期沼波瓊音と漱石

木下，宏一
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/1901715>

出版情報：九大日文. 28, pp.52-61, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

交錯する惑星

——前期沼波瓊音と漱石——

KINOSHITA
木下 宏 Kōichi
一

はじめに

平成二六(二〇一四)年七月に笠間書院より刊行された『夏目漱石周辺人物事典』(原武哲、石田忠彦、海老井英次共編)には、俳人・国文学者の沼波瓊音(本名武夫、一八七七一—一九二七)に関する項目(五一七—五二〇頁、執筆は松本常彦)も四頁にわたって設けられており、漱石文学はもとより明治・大正文学におけるその存在の重要性は、改めて確認されるところとなった。

東京帝国大学卒の文学士として蕉風俳諧を中心に古典文学に関する研究書・論文を数多くものし、洒竹、臨風、醒雪、独歩、露伴、風葉、花袋、漱石、未醒等々同時代の著名な文士・文化人たちと幅広い交際関係を築き、稀少な俳書をあまた収めた洒竹文庫(現東京大学総合図書館蔵)の整理と創設に尽力し、時には哲学的思索や新興宗教に没頭したりと多方面に名をとどめた沼波瓊音。その経歴と人物像、学問と思想については、前述事典の項目やその典拠となった基本文献——『国語と国文学／瓊音沼波武夫君追悼録』(昭二・一〇)、第一高等学校瑞穂会編・発行『噫 瓊音沼波武夫先生』(昭三・二二)、昭和女子大学近代文学研

究室編・発行『近代文学研究叢書二七／沼波瓊音』(昭四二・八)——によっておおむねつかむことが出来る。

しかしながら、じつさいのところこれまで一定の研究蓄積^①があるにもかかわらず、日本近代文学史・思想史上における沼波瓊音の位相は未だ明確に定まってはいない。その理由であるが、一つにはやはり、「全生命を打ち込んで日本精神研究に没頭」^②しその「言動は、一も国家、二も国家」^③であったと関係者から異口同音に回想されるほどに顕著な後年(大正中期〜昭和初頭)の右傾化が、戦後の研究者をして彼の総体評価にある種の脊髄反射的なブレを生じさせてしまっているのである。

もとより一口に「右」と言っても、理論的なものからファナティックなものまでその様態はさまざまである。近代日本の文学・思想・宗教の諸潮流のなかで、瓊音が、じつさいにどのようなプロセスを経てそうするに至ったのか。それはまた彼の明治期以来の国文学研究における必然的な越境の産物だったのか、あるいは、単に時代の瘴氣に当てられた突発的な麻疹のようなものだったのか。こうした点は、今後瓊音研究のみならず、国文学を含め、文学々を学び研究するという営みと国家・社会との関係性の在り方について根源的な洞察を深めていく上でも、不可避の検討課題である。

かかる認識において、本稿はまず基幹作業として、前期沼波瓊音(明治後期〜大正初期)の精神の軌跡を各種文献資料に基づき鳥瞰的に整理しなおし、併せて、そこから必然的に浮かび上がって来る夏目漱石(本名金之助、一八七七一—一九一六)との交錯に

ついで先行研究が見落としした意味を考察したい。

ところで、前期瓊音の内面をうかがうにおいてまず前提としておきえておかなければならないのは、日露戦争の終結(明三八・九)を一つの大きなターニングポイントとする日本の国内思潮の全体的動向⁽⁴⁾である。約一七億円の戦費と戦死・戦病死者数約八万四千〜二万人と推計される甚大な犠牲を払って強大なロシア帝国に軍事的勝利をおさめ、とにかくも「一等国」のあかしを手に入れた日本人一般の意識は、三国干渉(明二八・四)以来の長い緊張から解き放たれた達成感・安堵感と相まって漸次弛緩していき、とりわけ青年層の心理は国民としてより一個人としての自我の充足や成功を追求する傾向——「個人的発展を貴ぶこと今日の如く又た物質的幸福を求むること今日の如きは世界を通じて有史以来未曾だ曾て見ざる所なり」⁽⁵⁾——が目立ち始めたという。一方で文学・思想・宗教各界も、一高生・藤村操の華厳の滝への投身自殺(明三六・五・二二)等を契機として既に日露開戦前から鋭敏な知識人たちが意識していた「人生とは何ぞや、我は何処より来りて何処へ行く、といふやうなことを問題とする内観的煩悶の時代」⁽⁶⁾の本格的到来を前に、より活発な動きをみせ始めるのである。

一 若き国文学徒

沼波瓊音は、明治一〇(一八七七)年一〇月一日、愛知県名古屋(市制施行前)のかつて尾張藩の御目見御用掛医師をつとめ

た医家の長男として出生している。敬神の念篤い質朴な家風のもと幼少年期より漢籍に親しみ、長じては文芸全般就中小説を「酷愛」し、「小説に養はれ小説に酔ひ小説に教訓され小説に慰藉され」⁽⁷⁾ながら多感な日々を送り、愛知県尋常中学校(後の愛知一中)、第一高等学校第一部文科を経て、東京帝国大学文科国文学科に入学(明三二・九)する。家業の医学でなく国文学を志望した直接の動機は、中学在校当時、国語教諭で国学者の鈴木忠孝の熱心な古典講義に「感化」⁽⁸⁾されたことだという。

中学時代には他にも「人が皇室に関して、とやかく評するのを聞くと、何とは知らず、胸塞まり、涙ぐましくなつて、物言ふことさえ出来なかつた」⁽⁹⁾とか、一高受験時に下宿の一室に「勉強中如何なる来客あるも勅使の外一切応接せざる事」⁽¹⁰⁾と壁書していた等のエピソードがあり、後年人ごとに評される「熱情的な狂信的」⁽¹¹⁾な草莽の志士としての意識の淵源を垣間みることが出来る。

赤門の国文学徒としての瓊音は、中・近世古典文学就中蕉風俳諧を研究テーマとして種々の文献資料を涉猟・濫読する一方で、大野西竹、笹川臨風、佐々醒雪ら東京帝大OBが運営する俳句結社「筑波会」に加入(明三一・一一)し文学的感性と鑑賞眼をみがいた。二年次末には初の単著『俳諧音調論』(新声社、明三三・八)を親炙していた芳賀矢一(当時国文学科助教授)の校閲を受けて刊行する。その内容は、一句内の同音連鎖——例えば芭蕉の「古池や蛙飛びこむみづの音」(傍点瓊音)の句にみられ

るM音——をはじめ、力行音、夕行音、促音、撥音、字余り等々、俳句の音調における多様な表現効果を考察したもので、国文学界では「この種の研究の最初のもの」⁽¹²⁾として大いに注目されたという。自信を得た瓊音は、卒業後も、『蕉風』（金港堂書籍、明三八・五）、『俳論史』（文禄堂、明四〇・四）、『徒然草講話』（東亜堂、大三・二）など斬新で実証的な論著や、『瓊音句集』（新潮社、大二・五）など個性的な句集を次々と世に問い、気鋭の若手研究者・文士として明治後期から大正初期にかけて漸次その存在を社会に認知させていったのである。

二 国文学者は「不思議なる宇宙」に驚いたか

叙述は前後するが、明治三四（一九〇一）年七月に東京帝国大学を卒業した沼波瓊音は、専門の俳諧研究を着実に進めつつも、哲学館講師、三重県第三中学校国語教諭（中途で教頭に昇進）、文部省嘱託（国定教科書編纂業務等に従事）、『萬朝報』記者など職を転々とし、明治四四（一九一一年）四月からは体調の悪化もあって著述専業に入っている。この間（日露戦前―戦中―戦後）に在って、彼の文筆活動の領域は多方面に拡大し、評論、詩文、随想、紀行文などさまざまな原稿を『中央公論』『中学世界』『秀才文壇』等中央の諸雑誌に精力的に発表している。またそれとともに、中学時代より作品を愛読していた幸田露伴をはじめ、戦後「新文学」の旗手⁽¹³⁾としてにわかに文壇の脚光を浴び始めた国木田独歩、夏目漱石、田山花袋らと親交を結んでいる。

なかでも偶然手にした『独歩集』（近事画報社、明三八・七）に衝撃を受けて筆を執り「嘗て文の人井原西鶴翁を生み、今想の人国木田独歩子を生んだ日本の文壇の光栄は、全世界に誇るべし」⁽¹⁴⁾とまで賞賛した「独歩論」（『中央公論』明三九・五）は、従来文壇ではマイナーな存在であった独歩の「文名を世間に伝播」する上で「確かに大なる力」⁽¹⁵⁾を発揮したといわれ、近代文学史上に特筆すべき意義を有するものと評価されている。

瓊音が独歩の小説に惹かれたのは、何よりその作中に遍満する人生不可解・宇宙不可解の煩悶——「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です」⁽¹⁷⁾等——とそれに対して安易に「慰藉」と「解決を与へな」い作者の真摯で求道的な態度が「実に余自身の語余自身の文たるを覚える」⁽¹⁸⁾として、今現在のみずからの志向に全く符号していることを認めたためであった。

そして同じ頃から、瓊音は、漱石にも徐々に注目し始め、「漱石の文学論序なるものが昨年読売（新聞、明三九・一一・四、引用者注）に現はれた。僕はこれを読んだ時一種怖しいやうな感に打たれた。漱石はいつまでも己が不足を感じる人である、そこに偉大な所がある」⁽¹⁹⁾と述べるなどして、その「いつまでも己が不足を感じていくようなたまたまに自身と相通じる」何かを感じ取っていくのである。なお、両者の具体的な接点を確認出来るのは漱石の長篇小説『坑夫』連載中（『東京／大阪朝日新聞』明四一・一・四）のことで、同作の材料を提供した荒井伴男なる人物の素行について瓊音が漱石に口頭で注意を促した⁽²⁰⁾

のが最初とされる。

独歩・漱石との知遇を機縁としてか、国文学関係以外の瓊音の文章は、「物と物とを分ける為に線を引く。物を知得する為にぐるりと線を引く。(中略)線は迷の始である。線は墮落の始である。事物を事物の仮に感ぜよ」⁽²¹⁾とか、あるいは「一の物を二つの物に意識することは、吾人夢の中によくあることだ。或狂人は醒めてる時にもこれがあるさうだ。これを二重人格といふ。(中略)この二重人格は狂病的として疎んずべきことで無い。これを遣ることを熟練すると、たしかに己れを向上することが出来る」⁽²²⁾など、思弁性の強い個人的内容のものが多く目立つようになる。反対に、「日本が露国に勝ち得しは眞の国家なりしが為なり、国家陣中個人の隻影を止めざりしが為なり、日本は清める実在を建てむが為に露国と戦ひしなり」⁽²³⁾といった生来の氣質に基づくと思われる硬派な言説は時折わずかしかみられなくなっていく。

しかして彼の個人的煩悶は、時日を経るに従つてより実存的な苦悩の趣を強めていき、思索によつて得たひと時の小悟(安心)とそこに腰を落ち着ける暇もなく次々とわき上がつて来る疑念の無限ループを繰り返しながら——その間には「惜み惜み惜みても余りあ」る畏友・独歩の死(明四一・六・二三)があつた——明治末年に至つて極限に達する。

この頃既に彼の「文字通りの孤独」⁽²⁵⁾なたましいは生の意味・目的を完全に見失い、その先の「行末のドンづまり」に待ち構えている「身の毛のよだつやうな、正視すべからざる、二目と

見られぬ怖しい物」すなわち「死〓虚無」の想念を前にして「発狂するか、自殺するか、どちらか」にまで追い込まれつつあつた⁽²⁶⁾という。

「汝は何を為しつゝあるか」と云戦慄すべき問題(中略)これを解決するには、宇宙はどんなもの、全実在の形如何、これを知り得なければならぬのだ。⁽²⁷⁾

かかる言辭に集約される瓊音の根源的な問題意識には、西田幾多郎の著作等によつて膾炙され明治末期から大正初頭にかけて日本の哲学・思想界を席卷した生命哲学の思潮——「ベルグソンやジェイムスの意識の現象学的な思考法が、ショーペンハウエルの哲学の流行とないまぜになり、自分の意識を『生命』の現象と見、また、理性で抑えることの出来ない性欲などの衝動を、『宇宙の意志』の現れとする思想になつていった」⁽²⁸⁾——とのまさしき共時性をみて取ることが出来るよう。

三 『始めて確信し得たる全実在』

さて、危機的状況のまま明治の終焉——大正の開幕を迎えた沼波瓊音は、大正二(一九一三)年一月に漱石の友人で英文学者の野上白川(豊一郎)、翻訳家の村上静人らと芸術・宗教に関する一般研究公開の自由講座を企画し、五月にはみずから六回講壇に立つてそれまでの自身の迷える歷程とこのほどようやく

「掴み得」た(と信じた)大悟の内容を詳細に語り、翌々月にはその述録を『始めて確信し得たる全実在』と題して東亜堂書房より刊行している。同書を献呈された漱石は、礼状のなかで「頂戴した其日に読みました私は何より先にあなたの意気とあなたの心持とに感服致しました近頃は小説も評論もいくらでも出ます然しあゝいふ方面の事は誰も考へてゐません、所があゝいふ方面の事は窮所迄行くとは是非共必要になつて来ます」⁽²⁹⁾と述べ、これに最大級の賛意を以て応じた。その上で、かねて「小生もあなたに劣らぬ孤立ものに候」⁽³⁰⁾とどこか同志じみた親近感を抱いていた瓊音に対し、「人の事ではないみんな自分の頭の上の事です私はあゝいふ意味の事で切実な必要を感じつゝいまだ未程の地に迷つてゐます」⁽³¹⁾とみづからの真情を率直に吐露してみせたのである。

この『始めて確信し得たる全実在』に目を通したことが、漱石をして一時中断していた長篇小説「行人」の最終章「塵勞」(『東京朝日新聞』大ニ・九・二六連載再開)の構想を大きく変化させるきっかけとなつたことは、漱石文学の研究者ならば今日周知の事実であろう。朴裕河の緻密な分析に従えば、「塵勞」において登場人物のHさんが語つた有名な山を呼び寄せるモハメッド(マホメット/ムハンマド)の逸話(三十九、四十)や、事実上の主人公・長野一郎のどこかシェイクスピアを想起させる数々の台詞——「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」(三十九)、「僕は絶対だ」(四十四)、「何うしたら此研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだらう」(四十五)等々——は、そのま

ま当時の瓊音また漱石の偽らざる表白としてよむことが可能となる。⁽³²⁾

ところで瓊音が、「日輪右に在り、月輪左に在つて、汝黙せよと云つても、自分は黙しない」とまで言い切つた「モハメッドの豪語」⁽³³⁾よろしく、自信を持つて「掴み得」た大悟とはどのようなものであつたのか。要点を抽出しつなげてみよう。

宇宙は一つか。或は無数の箇々の集りか。

宇宙は空か。或は実か。

A か V-jou V-jou か。

諸君、私は解つたのだ。

私は、全宇宙は、Aであつて、同時に not-Aだ、と答へ得たのだ。

我々はあらゆる場合に於て、Aと not-Aとを、全く別所の物と考へて居たのが、迷であつたのだ。Aと not-Aとを、一つに視得て、始めて、ここに眞の知識が出来たのだ。これ実に私の悟であります。

一言にして便利な云方をすれば、矛盾の承認だ。

これを大宇宙に展げるのだ。大宇宙に就ても、やはり同様の承認が出来たら、即ちそれが大宇宙を知つた、全実在を見たと云ものであるのだ。

ベルグソンなども、斯うは云つてやしまひ。よし、在つたとしても、それは暗合なんだ。⁽³⁴⁾

多少なりと哲学・宗教を専門的に学んだ者であれば、瓊音の説
く「A = not-A / not-A = A」が、「生死即涅槃」「煩惱即菩提」

（『維摩経』）や「一切即一切」「一切即一」（『華嚴経』）といった大乘
仏教特有の哲理や西田幾多郎が晩年（昭一四頃）に到達したと
される「絶対矛盾的自己同一」の境位⁽³⁵⁾とそのいわんとする内
容においておよそ同じ事柄を語っていることを察知するであろ
う。じつさい瓊音も、大悟の後に「これは禅の方では、実に言
ひ古されたことであるのだ」と知って甚だ落胆したという。

だが、それでもとにかく自力で得証したものには違いなく、
気を取り直した瓊音は、「悟った³⁶だけで、悟りッぱなしでは駄
目だ。実行をせねば駄目だ。（中略）それを実地に活用しなくて
は駄目だ」として「真の意味の、修養を一生やる覚悟」⁽³⁷⁾をか
ためる。そしてまずは、参禅体験を持つ露伴や漱石のもとに出
向き率直に助言を乞い、後者の紹介で長篇小説「門」（『東京
大阪朝日新聞』明四三・三・六連載）に登場する禅僧・直道のモデ
ルとなった臨濟僧・釈宗活とその師である釈宗演に法縁を得
て、傍から見ても尋常ではない熱心さで谷中の禅堂・両忘庵に
通い詰めていった——「両忘庵には毎日御出掛ですかあつか
ら往復が御難儀でせう」——のである⁽³⁸⁾。

四 入信

みずから「掴み得」た（と信じた）大悟をより確かなものに練
り上げるべくひところ参禅に打ち込んだ沼波瓊音は、次にはそ

れを生きていく上で「実地に活用」すべく、具体的な「目的」
を探し求めるようになる。

諸君が、私に、「我々は如何に活くべきか」と問はれるな
らば、私は「其假で宜しい」と答へる。自覚して進みたい
とならば、「好きな事をなさい」と勧める。泥棒がしたい
なら、泥棒をしなさい。姦淫がしたいなら、姦淫をしなさい。
（中略）其の罰を少しでも恐れる心があるならば、それは
貴君が、本当に、「したいこと」、「好きなこと」では無
いのである。私が所謂「好きなこと」と云のは、渴したる
者が清水に対するやうな心、即ち前後の分別も何も無く、
殺されても、そちらの方へ駆附ける底のことを指すので
あります。（中略）斯くて我等は、「我の完成」を為しつつ、
ある、と云ことに、つまりなる。何でもよいから、「好き
な事」をして、「我」を完成して行くのだ。⁽³⁹⁾

たとえ人の世の理ことわりに照らしてどれほど愚かしくあろうと「殺
されても、そちらの方へ駆附け」るに値すると思ひ定めた「し
たいこと／好きなこと」に有限なる自身（A）の全存在を挙げて
取り組み、我を完成する。瓊音にとつては、それがそのまま、
無限なる宇宙（not-A）の意志と一体化する営みすなわち「実行」
となるのである。

しかして、大正四（一九一五）年から翌年にかけて、大平良平
の「未来の世界教」（『早稲田文学』大四・三）など天理教に関する

各種文献やベルギーの劇作家・メーテルリンク (Maeterlinck)

の『死後^トは如何 (Va Mort, 1913)』(栗原古城訳、玄黄社、大五・四)等を熟読し^ス靈^ス的^ナ方面^ニに^ニわかに刮目^シした^ル瓊音^ト

は、大正五(一九一六)年二月に、巢鴨町庚申塚の明治女学校跡で「至誠殿」という新興宗教を創唱していた山田鶴子なる祈祷師に出遇い、予言や透視、難病治癒等々同人のもたらす数々の奇蹟^ヲに魅^レ入^ラれ迷^ワず入^信し、七月には一家を挙げて巢鴨に移住するまでに至る^ヲ。教母の身辺に絶えず奉侍しその布教伝道に随行する、そうした非日常的な生活のなかに、瓊音は、まず^ニおのれの「したいこと／好きなこと」を見出したのであ^つた。

本人の証言によれば、入信中にはじつさいさまざまな神秘現象が眼前で起こり、「雨中に立つて濡れず、日月を隠し、風塵を避け、電車の腰掛から人を立たしむる」⁽⁴²⁾など「神様に一口御願するだけで、いろ／＼の不思議な事が出来た」⁽⁴³⁾とこのことである。

俳人の沼波瓊音は、此頃は千里眼になり済して、どんな病氣でも治すと威張つて居るが、どんなに頼まれても、たとへ又^トた向^ムふがどんな恩人であつても決して自ら出向くと云ふ事はせない。何時かも旧師の芳賀(矢一、引用者注)博士の慢性の病氣を見て遣つたらどうだと友達が勧めたら、「有難いと信するなら此方へ来るが宜い、其信仰ばかりでも病氣が治る訳だ」と高飛車に出たので、勧めた人は二言

と継げず、恐れ入つて参つて了つたのださうな。⁽⁴⁴⁾

しかるに、この時期のあまりにも常軌を逸した瓊音の言動は、いたるところで響^キを^ウる^キ、佐々醒雪などごく一部の理解者を除いて「或人には敗^レ徳漢と罵られ、或人には狂者として嘲^レけら^レれ、結果として「多くの友人を失^フ」⁽⁴⁵⁾ってしまった」とい^ふ。漱石もまたそうした友人たちの一人であつたか、どうか。じつさい、大正二(一九一三)年中には頻繁に書簡をやり取りしていた両者であるが、翌年以降はぶつつきと途絶え、生前言葉^ヲを^ウち^カへ^タしたのも確認出来る限りでは大正四(一九一五)年二月が最後——「節(長塚、引用者注)氏の死去(大四・二・八、引用者注)の報が新聞に出た翌朝沼波武夫君が来て(わざ／＼)向後長塚君の事に関し何かやる(遺稿を出版するとか其他)なら自分も加盟したいからどうぞ通知してくれと頼んで行きました」⁽⁴⁶⁾である。以後再び好誼を通じる機会を得ぬまま、翌年二月九日、漱石は満四九歳で没した。⁽⁴⁷⁾

五 漱石との訣別、それから

大正六(一九一七)年四月、諸般の事情から「至誠殿」に入^り出^来なくなつた沼波瓊音は、意を決して信仰生活を打ち切り東京帝国大学文科大学の国文学研究室および帝大図書館に通い始め、国文学者としての日常にひとまず復帰——「著述業者に⁽⁴⁸⁾戻^るべき運命になつた」——する。一説には、教母・山田鶴

子の「教養言動がいかにも低級で追々金箔が脱げ」ていき「遂に厭気がさし」た⁽⁴⁹⁾とのことであるが。

時あたかも国際社会ではロシア二月革命が勃発（大六・三）しおよそ三百年にわたってユーラシアに覇を唱えたロシア帝国（ロマノフ朝）が滅び、続く十月革命においてはレーニン率いる左派のボリスエヴィキが権力を掌握（大六・一一）して人類史上初の社会主義政府が樹立される。また、新興国アメリカが第一次世界大戦（歐洲大戦）に参戦（大六・四）し、膠着状態に陥っていた戦線も連合国側の優勢に大きく傾き始める。そうした海の彼方の出来事を望見しながら、瓊音は「今世界は絶苦の底にある。（中略）一個人の身に起る神秘、個人と個人との間に起る神秘と云ふやうな事にはのみ驚いて居る、又歓喜して居る場合では無い」⁽⁵⁰⁾と述べるなどして、しだいに脱個人的な志向をあらわにしていく⁽⁵¹⁾。それは、最後まで「個」を貫き⁽⁵²⁾通して「葛藤をもって葛藤にまつわる世界」⁽⁵³⁾を生きる道を選んだ漱石と最終的かつ決定的に快を分かったことを意味していた。

ここで今一度、前出の『始めて確信し得たる全実在』をひもといてみよう。該書の終盤で、瓊音は「私の完成」こそが「現代人の耳に、最も快く勇ましく響く」⁽⁵⁴⁾として各自に「実行」を奨励しつつ、一方では次のような可能性も示唆していた。

私が、若し、没我を快しとし、団結を快しとする時代に生れたら、「団体の完成」を唱道したでありませう。何と云つても、其の行為は、つまり同じ事をするようになるので

あります。「私の完成」は自から「団体の完成」となるもの、「団体の完成」は自ら「私の完成」となるものであります。⁽⁵⁵⁾

日露戦後における「内観的煩悶の時代」の空気を一身に体現するかのようになり、文字通り満身創痍となつて深い「懐疑の海を泳ぎ越し」⁽⁵⁶⁾て来た沼波瓊音。その鋭敏な意識は「没我を快しとし、団結を快し」とする新たな時代の気配を大正も半ばに差しかつた今、はつきりととらえていた。

はたして彼は、この後「東亜を先づ我が国と観じて、ひろく東亜を引つ包んでの愛国の熱情」⁽⁵⁷⁾をわき立たせ、そこから「我／個人精神」よりも高次の——漱石からみればずっと低次の——「国家我／国家精神」⁽⁵⁸⁾の完成を目指して行動を開始する。大正九（一九二〇）年には「革新右翼の源流」⁽⁵⁹⁾と評される政治思想結社「猶存社」に加盟し、北一輝、大川周明、満川龜太郎、鹿子木員信、綾川武治、安岡正篤ら国家革新の同志たちとこれも漱石の嫌つた「朋党」⁽⁶⁰⁾を結んで、将来の日本をして北部は極東シベリア・満洲から南部は濠洲までをも版図に収める「革命的大帝国」⁽⁶¹⁾たらしめんと、急進的な皇室中心主義・日本主義・国家主義・アジア主義等の言論・啓蒙活動に率先取り組んでいった⁽⁶²⁾のである。

おわりに

以上ここまで、前期沼波瓊音（明治後期～大正初期）の精神性的変容の過程⁶³を概観して来た。

大正初頭、瓊音は「教へし人」と題する小文のなかで、次のように述べている。

厳格なる意味に於て、今日までに余を教へし人は誰ぞ。父なり。鈴木忠孝先生なり。国木田独歩子なり。小栗風葉子なり。小杉未醒子なり。幸田露伴先生なり。⁶⁴

そこに漱石の名はないが、これは決して瓊音の意識における同人の相対的軽さを意味するものではない、と筆者は考える。ひとたび互いの精神の内奥に苦悩するもう一人の自分⁶⁵を見出し合った瓊音と漱石にとって、その関係性は世間的な枠組で対象化出来るほど単純なものではなかったはずである。

第一次世界大戦の後半、大正六（一九一七）年頃から顕著となる瓊音の「我／個人」から「全体／国家」への推移は、外発的には確かに、大戦やロシア革命などの世界的動乱も影響している。だが内発的にはやはり、漱石という等質の惑星をうしなひ、それによってみずからの「磁場」と「軌道」を大きく狂わせてしまったことが作用していたのだと推断したい。

今後更なる検証を進めていく所存である。

【注記】

1 松本旭「二つの俳論史——沼波瓊音と樋口功」（『俳句』昭四〇・七）、

紅野敏郎『沼波瓊音『瓊音句集』』（国文学 解釈と鑑賞）平一・六）、山口昌男『敗者学のすすめ』（平凡社、平二・二）、山下武『ドツベルケンガー文学考——沼波瓊音』（『幻想文学』平一四・三）、打越孝明『瑞穂会の結成および初期の活動に関する一考察——沼波瓊音、黒上正一郎、そして大倉邦彦』（『大倉山論集』平一五・三）、占部賢志『旧制一高に「国士」ありき』（『祖国と青年』平一六・五）、小塩卓哉『定型のリング——沼波瓊音の再評価』（『獅子吼』平二二・一二）、木下宏一『国文学者は国家革新の夢を見たか——晚期沼波瓊音の思想と行動』（『比較文化研究』平二七・一〇）等。

2 瑞穂会『序』（同会編・発行『噫 瓊音沼波武夫先生』昭三・二、以下『瓊音先生』と記す）二頁。

3 高島米峰『多感なる哲人としての沼波君』（前掲『瓊音先生』）二六頁。

4 橋川文三『昭和維新試論』（朝日新聞社、昭五九・六）、有馬学『日本の近代4／「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、平一一・五）、末

木文美士『明治思想家論』（トランスビュー、平一六・六）等を参照。

5 浮田和民『現代生活の研究』（『太陽』明四三・六）三頁。

6 安倍能成『岩波英雄伝』（岩波書店、昭三二・一二）六一頁。

7 瓊音『独歩論』（『中央公論』明三九・五）九三頁。

8 瓊音『学生時代の学科に対する名流の回想』（『江湖』明四一・七）二五頁。

9 石村貞吉『追憶』（『国語と国文学／瓊音沼波武夫君追悼録』昭二・一〇、以下『追悼録』と記す）五〇頁。

10 瓊音『俳話小品しる榊』（博文館、明四五・七）二四二頁。

11 青山なを『若き日のあゆみ』（慶應通信、昭五九・八）一九四頁。

- 12 西垣修「沼波瓊音」(『人と作品 現代文学講座 第3集/明治編第3』明治書院、昭三六・七) 三三七頁。一方で、俳壇特に当時の革新勢力であった日本派の評価は「ざつと見るのに無用の議論で終始してゐる様だ」と必ずしも高くはなかったようである。高浜虚子「俳話 音を現したる句」(『ほととぎす』明三三・一一) 一一頁。
- 13 坪内祐三『近代日本文学』の誕生——百年前の文壇を読む』(PHP研究所、平一八・一〇)を参照。
- 14 瓊音前掲「独歩論」一〇二頁。
- 15 忘憂子「文芸時報/丙午文壇の概観(上)」(『読売新聞』明三九・一二・二三・六面)。
- 16 大東和重『文学の誕生——藤村から漱石へ』(講談社、平一八・一二)を参照。
- 17 独歩「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』明三四・一一)、『独歩集』(近事画報社、明三八・七) 八二頁。
- 18 瓊音前掲「独歩論」九四、一〇〇頁。
- 19 瓊音「文学論序」(『新古文林』明四〇・二)；山口昌男監修『沼波瓊音/意匠ひろひ』(国書刊行会、平一八・八) 一九五頁。
- 20 夏目鏡子『漱石の思ひ出』(改造社、昭三・一一)；再版(文藝春秋、平六・七) 二〇九、二一〇頁。なお前出『瓊音先生』所収の「略歴」には、明治四一(一九〇八)年四月に「偶然夏目漱石来訪、近づきとなる」とある。
- 21 瓊音「線」(『新古文林』明三九・九)；前掲『意匠ひろひ』一六二、一六三頁。
- 22 瓊音「二重人格奨励論」(『新古文林』明四〇・一)；前掲『意匠ひろひ』一八六頁。
- 23 瓊音「御旗の光の後に書す」(『日露戦役御旗之光 第一師管健児部隊戦記』大日本奉公会編輯部、明四〇・九) 三頁。
- 24 瓊音「独歩」(『大疑の前』東亜堂書房、大二・七) 一二三頁。
- 25 瓊音『現代文芸叢書 第三十編/七面鳥』(春陽堂、大二・一〇) 二六頁。
- 26 瓊音『始めて確信し得たる全実在』(東亜堂書房、大二・七) 二〇、六七、六八、七一頁。
- 27 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』 七一頁。
- 28 鈴木貞美『大正生命主義』とは何か』(同編『大正生命主義と現代』河出書房新社、平七・三) 六頁。この時期の生命哲学の流行については他にも、船山信一『大正哲学史研究』(法律文化社、昭四〇、一一)、檜垣立哉「西田幾多郎の時代的作用——大正時代の生命主義に関するノート」(千葉正昭他編『大正宗教小説の流行——その背景と』いま『論創社、平二三・七)、鈴木由加里「大正期のベルクソンの流行について」(前同)等を参照。
- 29 漱石『沼波武夫宛書簡/大二・九・一付』；『漱石全集 第二十四卷』(岩波書店、平九・二) 二〇〇頁。
- 30 漱石『沼波武夫宛書簡/大元・二二・二六付』；前掲『漱石全集 第二十四卷』 一七八頁。
- 31 漱石前掲『沼波武夫宛書簡/大二・九・一付』 二〇〇頁。
- 32 漱石「行人」；『漱石全集 第八卷』(岩波書店、平六・七) 四一二、四一四、四一五、四二六、四二九頁。朴裕河『ナショナルアイデンティティとジェンダー——漱石・文学・近代』(クレイン、平一九・七) 二〇七

（二一八頁）。

- 33 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』二頁。
- 34 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』七七・七八〇、八二、九二頁。
- 35 小坂国繼「絶対矛盾的自己同一」とは何か（『西田幾多郎の思想』講談社、平一四・五）を参照。
- 36 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』九五頁。
- 37 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』九六、九七頁。
- 38 漱石「沼波武夫宛書簡／大二・八・八付」…前掲『漱石全集 第二十四卷』一九五頁。一時は本気で家庭を棄てて出家することまで考えた（大二・一一）という。なお、その頃の参禅体験を瓊音自身が私小説風に綴った文章に、「白日下の涙」（『新小説』大二・七）、「夏の陽炎」（『反響』大三・四）等がある。
- 39 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』一四九、一五〇、一五五頁。
- 40 露伴の日記（大五・四・一七付）には「夜沼彼武雄 栗原元吉（古城、引用者注）来る。二人降神術の如きことを語る。所謂御筆さきによつて古今の事を知るといふ。御筆さきは蓋し許氏の書に見えたる寂なるべし。論語の如きも御筆さき即神示によりて新解を得、これを新修養社に寄せたりといふ」とある。『露伴全集 第三十八卷』（岩波書店、昭二九・九）三五二頁。
- 41 文壇からは他にも、小山内薫や池田大伍が入信するなど、山田鶴子は一時「巢鴨の神様」として世間の注目を浴びたが、後に教団本部を他所へ移転してからは大した発展もなく終わったという。新聞記事「奇蹟を行ふ婦人 巢鴨至誠殿の神様として知らる」（『読売新聞』大五・六・一〇）、石橋臥波「女神様列伝」（『婦人世界／愛情研究号』大一〇・一）、中村武
- 羅夫編『明治大正文豪研究』（新潮社、昭一一・九）等を参照。
- 42 松本道別「沼波さんと信仰」（前掲『瓊音先生』）一九一頁。
- 43 瓊音「紅の雲」（『花月』大七・一〇）…前掲『意匠ひろひ』三八五頁。
- 44 △口●「文芸雑事」（『日本及日本人』大五・四・一）一九九頁。
- 45 瓊音「俳味が無くなつてから今日まで」（『旅日記』大九・一）…前掲『意匠ひろひ』三三一頁。
- 46 漱石「斎藤茂吉宛書簡／大四・二・一七付」…前掲『漱石全集 第二十四卷』三九六頁。
- 47 一方の瓊音は、昭和二（一九二七）年七月一九日、奇しくも漱石と同じ満四九歳で没している。
- 48 瓊音「自序」（『やなぎ樽評釈』南人社、大六・一〇）三頁。
- 49 松本前掲「沼波さんと信仰」一九一頁。
- 50 瓊音「第一義の所から」（『雄弁』大六・一〇）四一頁。
- 51 もっとも、それは当時瓊音に限ったことではなかった。文壇・論壇では、例えば生田長江や三井甲之、鹿子木員信などの主張に同様の志向が顕著にみられる。宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想 軌跡編』—安部磯雄と鹿子木員信の場合（木鐸社、昭五九・三）、中山弘明『第一次大戦の〈影〉—世界戦争と日本文学』（新曜社、平二四・一二）等を参照。
- 52 亀山佳明『夏目漱石と個人主義』—《自律》の個人主義から（他律）の個人主義へ（新曜社、平二〇・二）を参照。
- 53 松本常彦「漱石と禅——「行人」の場合」（『語文研究』平一八・一二）三四頁。
- 54 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』一五七頁。
- 55 瓊音前掲『始めて確信し得たる全実在』一五七、一五八頁。

- 56 瓊音前掲「俳味が無くなつてから今日まで」三三三頁。
- 57 瓊音「序」(『鮮満風物記』大阪屋號書店、大九・一一)七頁。
- 58 瓊音「国に就て」(前掲『追悼録』)一六頁。
- 59 大塚健洋『大川周明』(中央公論社、平七・一二)一〇三頁。
- 60 漱石「私の個人主義」(学習院講演、大三・一一・二五)・漱石全集第十六卷(岩波書店、平七・四)六〇八頁。
- 61 猶存社「綱領」(『雄叫』大九・一〇)・宮本前掲『宗教的人間の政治思想 軌跡編』一三七頁。
- 62 詳細は、木下前掲「国文学者は国家革新の夢を見たか」を参照。
- 63 この時期の自身の内面について、瓊音は後年、「具体よりも抽象を高しとし、実行よりも瞑想を高しとし、日本人と言ふ態度よりも人類と言ふ態度を高しとし、因襲の一切は、その因襲たるが為のみにて卑しとなす。これ等の心持に似たるもの」と自嘲気味に回想している。瓊音「巻首辞」(『徒然草講話』再版、修文館、大一一・一)一頁。
- 64 瓊音「教へし人」(前掲『大疑の前』)三五、三六頁。
- 65 松本常彦は「馬鹿々々しきまでの西洋崇拜か、馬鹿々々しきまでの国粹保存か、日本人はこの二途の外に歩む路を發見せざるか。両つながら馬鹿々々しきなり。時にこの兩者を妥協せしむる者あり。妥協は更に馬鹿々々し。馬鹿の骨頂なり」という瓊音の文明批評的言説を取り上げ、瓊音と漱石は「西洋近代の受容の不可避を十分に知りつつ、その受容の苦さと不幸とを見てしまふジレンマを抱え込む点」においても「本質的に「通じている」と意味深い指摘をしている。瓊音「二途」(前掲『大疑の前』)三〇、三二頁。松本「沼波瓊音」(原武哲他編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、平二六・一〇)五一九頁。因みに瓊音には、「分身」(『心の花』明三九・六〇一〇連載)という中編小説があり、「至誠殿」への入信以前からも「分身」「転生」「再生」といった超常現象を本気で信じていたふしがみられるという。山下前掲「ドッペルゲンガー文学考」を参照。

(九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年)